

# じねん 自然に学ぶ (2)

株式会社 漢 明  
社長 三戸 唯 裕

ばら作り日本一のコツ  
ばら作りの心に学ぶ

昭和60年度「ばら作り日本一」の称号を与えられた名人に新聞記者が日本一のばら作りのコツを質問していました。

名人は次のように答えていました。

「ばら作りのコツを一口に言えといわれたら、それは、毎朝、一本一本のばらと対面して『おはよう』と挨拶をすることです。」と。

この言葉の中にはばらにこめられた愛情が溢れていますね。

ばらも毎朝同じ表情で名人に答えてくれる訳ではないでしょう。元気のない日や苦しそうな時もある筈です。

元気のない時は肥料を与えてやったり、苦しそうな時には虫がついているのではないかと丹念に虫を捜し、防虫剤の薄め方にも気を使って上げるのでしょう。

日本一のばらを育て上げたコツはただ一つ「朝、目が覚めたら何をさし置いてもバラの顔を見ないではいられない」ばらへの「愛」だということです。

その言葉をそのまま「ばら」を「肌」に置きかえてみると「観肌」の心になるのです。

名人はばら作りの日課として義務感からただ、毎朝ばらを見

て廻っただけとしたら、ばらの心まで解らなかつたでしょう。



この「差」がすべてのことに通じる「差」だと思います。

母親は義務感から子供を観察したりはしないでしよう。

子供の内部に入りこむ直観を、ただ「いとおいしい心」で毎日繰り返し重ねているだけなのです。

観肌の心もここにありません

あなたが毎朝鏡を見るのも、ただ日課として顔を洗った後、鏡の中のあなたをほんやり眺め

ていても本当はなにも観てはいないのでないでしょうか。

肌の喜びが、肌の苦しみが解るようになって、はじめて、その日、その時の肌に一番適した手入れをして上げられるようになるのだと思います。

「シミ」も「吹出物」も「肌荒れ」も決してあなたが作りたくて作つたもの、ではないでしょう、でも、作りたくなくてもあなたが無意識に作ってしまったもの、ではあるのです。

思い出して下さい。

紫外線に長時間あたり過ぎた。

内臓を痛めつけた。

抗性物質を飲み続けた。

精神的動揺でイライラした。

化粧品を考えもなく乱用した。

どれ一つ取ってみても肌にとっては大変な負担です。

肌からしてみれば、あなたに、「過失傷害罪ですヨ！」と叫びたい気持ちでしょう。

その叫び声があなたに聞えなかつた、としたらやはりあなたは肌に対して関心が薄かつた、と言えるのではないのでしょうか。

「ばら作り日本一」の名人は、ばらの心が解るまでにばらを愛しました。

まして肌は貴女自身です。

まず肌を観ることから始めて、肌をいとおしみ肌の心が解るまになつて下さい。